牛乳のふたを拾った彼を好きになった

今日の体育の時間。

グラウンドに出ていく時に「水筒」のヒモの部分をもって、ボトルの部分をカンカン蹴りながら歩いている男の子がいました。

丁度網に入ったサッカーボールを連続で蹴るかのように（※写真はイメージです。）。

私は、その子を手招きして呼びました。
T「なんで呼ばれたか分かる？」
S（首を振りながら）「ううん、分からない」
T「水筒は蹴る物じゃなくて、飲み物を飲むための道具だよ。」
S「うん。」
T「だからね、今みたいにカンカン蹴らない方がいい。なぜか分かる？」
S「壊れちゃうから？」
T「そう、蹴ってると周りも傷ついて中も割れてしまう事があるからね。」
S「わかった。」
T「それからね、水筒を蹴らないで大切に運んだり使ったりしていると、とてもいいことがあるんだよ。それは分かる？」
S「うーん、わかんない」
T「この水筒はね、お父さんとかお母さんが一所懸命働いたお金で買って貰ったもの。それを大切に使っていると、お父さんやお母さんも嬉しいんだよ。あとは、この水筒を作った人もきっと嬉しい。それだけじゃなくてね、物を大切に使っていると、その姿を見た人から「〇〇くんってものを大切に使っていて素敵だな」と思われることが増えるんだよ。つまり、〇〇くんのことを好きな人が増えるっていうこと。」
S「うんわかった！」
T（思い切り小声にしてささやくように）「ちなみにね、先生も小さい頃同じことで大人の人に注意されたんだよ。」
S「えーほんと！！？」
T「その時小さかった先生もこんな風に教えて貰ったから、あなたも大きくなって同じことがあったらぜひこうやって教えてあげてね。」
S「わかった！」
その子は笑顔で水筒をもって駆けていきました。
「物の扱い」は「人の扱い」にも通じると言います。
以前、コスモスハーモニーの 19 号にも次のことを書きました。

イチロー選手は、アメリカや日本各地の学校で講演会をしています。
スーパースターの来校に、どの子も大興奮です。
当然、子どもたちは次の質問を投げかけます。
「どうしたらイチロー選手みたいに野球がうまくなりますか？」と。

イチロー選手は、次のように答えるといいます。

自分の持っているバットやグローブを大切に使うことだよ。

シアトルの小学校で講演会をした時も、次のように話したそうです。

みんな道具を大切にしてください。

お父さんやお母さんに買ってもらったバットやグラブを大切に扱い、手入れすることで好プレーが生まれるんです。

一見、道具を大切にする事と野球が上手くなる事は、結びついているようには思えないかもしれません。

ですが、その野球のトップを走り続けてきたイチロー選手は、使っている道具を大切にする事こそが一番大切だと言っています。

小さなころからイチロー選手は、野球道具を大切にしていました。

どんなに夜遅くまで練習があっても、ロッカー室に戻った後にスパイクの土を落とし、バット、グラブを一時間以上丹念に手入れしてから帰ったそうです。

第 1 クォーターの頃より、道具の扱いは日を追うごとに丁寧になってきていますが、まだまだ改善の余地があるのもまた確かです。

先の水筒の件だけでなく、トイレの使い方も、筆箱の中身の使い方も、実は毎日のように声をかけ続けているところでもあります。

ご家庭でも、筆箱の中身をそろえていたり、鉛筆を自分から削っていたり、水筒やファイルを丁寧に使っている姿などが見られましたら、ぜひ教えていただければと思います。

「家でこんなことができるようになったんだね」と学校でも力強くその成長の姿を称え、共に喜びたいと思います。

その時に、単純に物を大切にしなさいという話だけでなく、その子がそれをしたくなるような話があれば尚最高です。

そういったエピソードなどもありましたら、ぜひ教えてください。

1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)

以下に、自分自身のエピソードではありませんが、ある本に載っていたお話を紹介します。

タイトルは、「牛乳のふたを拾った彼を好きになった」。

こんな風に物の扱いについて教えられたかったなぁと私が感銘を受けた文章です。

中学校一年生の時、同じクラスに人気者の男の子がいた。小学校は違ったが、足が速かった彼は私の小学校でも有名で、入学前から名前を知っていたくらいだ。

その男の子は、足が速く頭もよかったが、特に目立つというわけではなかった。「ひょうきんで明るくて人気者」というのとは違い、「クールな人気者」だった。

その子のことを好きだという女子は結構たくさんいたと思う。私が知っているだけでも、四、五人はいた。バレンタインデーには、チョコレートをたくさんもらっていた。

私は、初めは特にその子が好きという訳ではなかった。確かに人気者だったので、体育館で整列した時や、クラスで席替えをした時など、偶然隣になると少しドキドキはした。

色鉛筆を忘れたという彼に、自分の分を貸してあげる時には、クラスの他の女子の視線が気になったりもした。

それでも、「好きな人は？」と聞かれた時に、その子の名前を思い浮かべることはなかった。

それが、ある日の給食時間に一変する。

給食を食べ終え、ごちそうさまのあいさつもすまし、各自が食器を片づけるために並んでいた時のことだ。

私のいる場所から斜め少し前に、牛乳びんのビニールのふたが落ちていた。落とした人は、そのことに気づかずに行ってしまったようだ。

そして、その横を何人かが気がつかずに、または気づいても無視して通り過ぎて行った。

（あーあ、仕方ない、私が拾おうかなぁ…）

と思っていたその時、落ちているふたにすっと伸びる手が見えた。とてもさり気なくふたを拾い上げたその人は、あの人気者の彼だった。

（この人、偉い！）

私はすごく感激した。あまりにもさり気なく、当たり前のことをしただけという彼の行動が、かっこよく見えたのだ。

その現場を見ていたのは私一人だったようだ。誰もそんなことには気がつかずに自分のことだけしている。

私の周りは時間が止まったようだった。彼が光って見えた。

ほんのちょっと前に、「仕方がないから自分が拾おう」と思っていたことが恥ずかしくなった。

その時、私は彼のことをはっきりと「好き」になっていた。それは、足が速いからとか、頭がいいからとか、人気者だからとかいう理由ではない。

自分だけが知っている（と、私は思っていた）彼の本当のかっこよさを好きになったのだ。そして、そんな彼の一面を誰にも言わずに、内緒にしていた。

言ってしまうのがもったいないくらい、彼のその行動が光っていたのだ。

大人になった今なら、それくらいのことでは人を好きにならないかもしれない。それでも、どこでも平気でたばこをポイ捨てするような人よりは、誰のものか分からないゴミを当たり前に拾える人の方がかっこいいと思うし、好きだ。

「一目惚れ」で人を好きになることも、もちろんある。でも、たいていは、日常の些細な出来事の中に「その時」があるように思う。特別な出来事や変わった出来事がなくても、異性をかっこいいと思う場面はどこにでもあるのだ。